

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391500016		
法人名	有限会社 さかがわ		
事業所名	グループホーム優海		
所在地	熊本県天草市御所浦町御所浦3916-6		
自己評価作成日	令和元年12月29日	評価結果市町村受理日	令和2年2月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和2年01/26

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

御所浦の港から烏峠へと続く山道の途中に立地し、毎年開催される「烏峠・パノラマウォーク」の際は町内外からの参加者がホームの横を通るときに「行ってきます」「ただいま」と手を振って下さるのが恒例の風景となっている。
昔からの馴染みの利用者が集う優海では、朝から晩まで笑い声が絶えず職員の中からも「仕事に来るのが楽しい」との言葉が漏れ聞かれている。
可能な限り“自分らしく暮らしていただくこと”を全職員で共通の目標とした上で、出来ることの継続と必要な支援を見極め提供するよう心がけている。また、診療所のかかりつけ医と連携を図りながら、利用者の健康面においても安心して生活が出来るよう支援を続けている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設して経年の流れのなかで、入居者の入れ替わりはあるものの、外出やアクティビティの他、料理への参加やモップでの掃除等の生活リハ等役割のある生活がこの地で生きる喜ぶに繋げている。日々健康管理を徹底し、あまり変動の無い職員体制も、入居者や家族への信頼感に繋げ、代表・管理者と中心とした風通しの良さは、様々なケアへの工夫として表れている。地域の中での生活基盤も確立し、気軽に立ち寄れる環境とともにホームに灯る明かりが近隣住民への安心感を与える等ホームの役割が更に大きくなっている。御所浦という環境を受け入れ、文化祭へ出向いたり、保育園児との交流、伝統行事等を楽しみ、入居者同士の会話が飛び交い、和やかな、笑いの絶えないホームが形成されている。最高齢99歳の入居者の7年前の目標である”オリンピックを観る”の実現に向け、今後も健康管理や職員の観察力を生かしたケアに大いに期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	今年度から二ヶ月に一度、各職員に目標を設定してもらい、利用者様各々が“その方らしく”毎日を送れるよう心がけている。	開設時から“ゆとりある ゆかいなせいかつのため”とする基本理方針をケア規範として、毎月目標を振り返り、“らしく”に注視した日常を支援している。料理担当として勤しむ入居者等残存能力や“したい”との思いに寄り添い、地域の中での生き生きとして生活ぶりに地元の強みを生かした運営であることが確認でき、明かりが灯るホームの存在は安心感や心強さとしても地域に浸透しているホームである。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	花火大会や秋祭りへの寄付をはじめ、今年度は町の文化展に優海で制作した貼り絵を出展した。又、毎月移動図書館に来てもらい、利用者に好きな本を選んでいただいている。	老人会からのボランティアとしての訪問や、小学校の運動会、保育園との交流等地域の中の一員として入居者も関わっている。同じ島の方々が同席するテーブルでは昔話に花が咲き、ご近所からの頂き物や近隣住民の立ち寄り、駐在所からの訪問等もあり、ホームの運動会には老人会も楽しみに参加されている。また、町の文化祭が入居者の日常にメリハリや自信回復に反映され、外出へ繋がる等地域の中での生活は充実したものである。御宮の伝統行事がホームにも廻る等ホームに入居しても地域との関係性が途切れる事の無いホームである。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ワークキャンプ事業では、職員が指導しながらバイタルチェックや歩行介助など中学生に体験してもらっている。又、老人会のボランティア訪問時は一緒にレクレーションに参加していただきながら、ありのままの姿を見ていただき理解していただけるよ努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	水害・土砂災害マニュアルを提示し、委員からの率直且つ的確な助言を基にマニュアルの見直し、修正を行った。また、身体拘束等の廃止に向けた職員勉強会の内容を報告し、意見や感想を求め貴重な意見を全職員で共有している。	定例化した運営推進会議は、ホーム側からの報告に対して、適正な意見が出されるという充実した会議である。転倒による報告では今後のケアに対する適切なアドバイスや、身体拘束等の適正化検討委員会での勉強会の内容により第三者的な視点での意見等参加されるメンバーもこの会議の開催される意義を認識されていることも表れている。委員の意見や提案に、ホーム側も真摯に捉え、全職員で検討し、今後のケアに反映させるとしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の集団指導には欠かさず出席するよう心がけ、情報収集に努めている。また、PCメールも逐一確認をし、不明な点は担当者へ問い合わせ適切な指示やアドバイスをいただいている。	行政からの情報はメールで確認し、集団指導へ参加や、ホームも地域ケア会議へ参加している。地域包括支援センターからは在宅生活困難者の情報等がホームに伝えられ、社協からも待機者状況や入居相談等も上がる等協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束等の適正化のための指針を定め、全職員が基本方針や禁止事項に関して理解をしている。又身体拘束等の適正化検討委員会を法人内で2回、運営推進会議の際に2回開催し、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	身体拘束等の適正化指針を見直し、外部研修及び法人内での復講により意識を強化させている。また、法人としての委員会、及び運営推進会議の中で検討する体制とし、まずは不適正なケアで気づき、早めに改善をすることとしている。全員が自己点検シートを通じて学び、笑って過ごせるホーム作りに取り組み、報道等の事例もその原因などを追究し、他人事と思わないよう代表から注意喚起されている。入居者の外に出たいとの思いに応え、ウッドデッキを取り付け、安全な外出体制とするとともに、所在確認や見守りの徹底により、抑制の無い自由な環境を作っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	実際に起こった虐待等の事案について、報道や新聞記事を通して情報を収集し、その原因や回避策はなかったのか等全職員で話し合う機会を設けている。更に、虐待を他人事と捉えることのないよう勉強会や内部研修において、自分達の日頃のケアのあり方を振り返りながら、「虐待はあってはならない」との認識を再確認している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を活用中の利用者が1名おられる。後見人(社協職員担当者)とは金銭面をはじめ、様々な事項に関して連絡を取り合い、連携を図っている。又、成年後見制度の研修会にも参加をし必要性を再認識している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前に口頭や文章で説明を行っている。ご本人やご家族が不安、疑問に思うことにも丁寧に説明を行い、納得した上で利用開始がいただけるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	重要事項説明書に内外部への相談窓口を記載し説明を行っている。実際は面会時や電話の際にご家族から意見を聞くことが多く、職員は丁寧に対応し話しやすい環境作り心にかけている。	意見箱や訪問時に意見や要望がないか聞き取りし、「出来ることはさせて欲しい」や「お盆に連れて帰るためにも歩かせてほしい」等の家族の希望をプランに具体的に反映させている。家族からの電話や定期的な訪問等もあり、担当職員のコメント付きで情報を発信する他、運営推進会議の情報も便りで報告している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員ミーティングや勉強会兼食事会に代表や管理者も参加をし、職員の意見を汲み上げるよう努めている。	朝・夕の申し送りにより日々の状況を共有し、今年度は法人に対するアンケートにより体調や心の状態、勤務時間や夜勤の回数、異動の希望、経営やサービスへの改善点等を聞き取りし、運営に反映させている。また、ミーティング時に新聞報道等を受け、注意喚起し、働き方改革等の法改正に職員に逐一説明している。代表や管理者を中心として、意思疎通の良い関係が築かれている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	昨今、職員アンケートを実施し、雇用形態に関することや、各々の心身の状態、会社への意見・要望を収集した上で、やりがいを持って働けるよう職場環境を整えた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	定期的な内部研修や勉強会の開催、又職員各々の経験や力量に合わせ事業所内で役割(委員会)を持ってもらうなどスキルアップに繋げている。外部研修については参加する職員が特定化されており、勤務態勢の調整など研修に参加できる機会の確保が課題である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス連絡会の研修会、地域ケア会議、地域連携会議への参加を通じてネットワーク作りに努めている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ゆっくりと本人の話を傾聴し、不安に思うことや困っていることなどを把握しつつ、出来る改善策等を講じることを伝えながら、安心していただけるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	話だけでは分かりにくい部分もあり、実際見学に来ていただいた後、改めて疑問に思っていることや要望等を聞き取り、対応するようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	まず本人や家族から情報を収集するとともに、担当ケアマネ等からも情報を提供していただき、必要とする支援を見極めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	調理でもタマネギの皮むきから魚を捌く作業まで、利用者それぞれの出来ることを見極めながら手伝っていただき、同じように労いの言葉をかけるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の面会時は自室でゆっくり過ごしていただき、関係が保たれるよう支援している。遠方におられる家族には、広報誌を通じて日頃の様子を伝えたり、電話の際に近況を報告するなどしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の要望に合わせて理髪店に出かけたり、ドライブの際は馴染みの方と会えるよう、自宅付近を通るように配慮している。	住み慣れた我が家に出かけ知人との歓談に興じたり、馴染みの床屋への外出、近所からの入居者の存在に安心して入居された方、同じ島からの入居者同士がテーブルを囲み昔話に花が咲いたりこれまでの関係を継続されている。初風呂、七草、干し柿作り、伝統行事である“よいとんご”等もホームに居て楽しめる環境であり、慣習等を継続して支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居前の自宅が近所であった、以前から仲が良かったなど利用者同士の深い繋がりは今後も継続できるように、そしてまた職員が間に入ることで新たな関係性も構築できるよう努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居された方の家族にホームの近況を尋ねられることも多い。また、「知り合いがいるから」、「親戚がお世話になっているから」と面会に来られたり、先日は「知っている職員もまだいるから」と亡くなられた方の家族が8年ぶりに遊びに来られた。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意思表示や意思の疎通が困難な場合には、表情や仕草から本人の意向を汲み取り、出来る限り希望に添えるよう努めている。	入居者の中には、行きたやしたいを直接職員に申し出る方もおられるが、自分の思いを発せられる場合でも、家族に確認しながら思いに応えている。また、何気ない言葉の裏にある真意を推察しながら、本人本位になるよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に収集した情報を基に、入居後も本人や知人、親戚から聞き取りを行いより良い生活環境が提供できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	朝のバイタルチェックでまず体調の確認を行い、その日の過ごし方について本人の要望も踏まえながら考え、支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の要望に添って介護計画を作成している。心身の状態に変化が生じた場合は、担当職員が中心に意見交換を行い介護計画に反映させている。	職員の日々個々の目標に沿った記録(日中・夜間、医療的な観点等色を分けている)と、3ヶ月毎のモニタリングにより継続の可否を見極めている。退院後は様子を見ながらプランを見直している。入居者のできる事は自分でとの思いには、歩行器による安全な移動をプランに組み入れられたり、これまでできていたことの継続としてホームでの役割を見出し、笑えて過ごせることで楽しい生活を支援する事等個別性のある具体的なプランが作成されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の経過記録に、本人の思いに繋がる発言や気付いたことを記録し、必要に応じて口頭でも申し送りを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	母体事業所より利用者の身体変化に合わせた、迅速な福祉用具の貸し出しが出来ている。また、島外への受診付き添いや、家族との外出外泊の送迎支援など柔軟に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	月に1度の移動図書館の訪問があり、読書好きな方の楽しみが継続できている。また近隣の住民から花火大会や鬼火焼きの見物や参加への声を掛けていただく事で、地域の方と交流が出来ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所の協力医療機関の診療所を元々のかかりつけ医とされていた方が殆どであるため、主治医とのスムーズな連携が図れている。必要時には島外の医療機関へ受診をし適切な医療を受けられるよう支援している。	入居者全員が診療所をかかりつけ医として、月1回の訪問診療としている。レントゲンなどの検査時には受診に出向き、休診日(土・日)を考慮し、心配な点があればその都度支持を仰いだり、早めに受診し、必要に応じ、担当医師より島外の専門医に紹介されている。職員は日頃から健康管理を徹底し、冬場は特に手洗い・うがいにより感染症予防に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員が気付いた利用者の変化は、看護師や管理者へ伝えられ受診するかどうかの検討を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院が必要となったときは介護サマリーを作成し入院病棟へ情報の提供を行っている。入院中は定期的に面会に行ったり、担当看護師へ病状を確認するなどしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化及び看取りに関する指針にて、ホームで出来ることの説明と意思確認を行っているが、実際に重度化した場合や終末期に差し掛かると家族の気持ちに変化が生じるため必要に応じて意思確認を行っている。	入居時に“指針”をもとに、重度化した場合の方針を説明し、その後入居者の状態を見ながら説明を重ね、必要な時点で同意書を交わしている。家族の中にはホームで最終までを望まれる方が多く、協力医である診療所との連携により支えている。職員は、入居者の状態変化(いつもとの違い)に、随時家族に報告している。	看取り支援は、立地上の条件(離島)も含め、最終の場に立ち会えない場合もあることなどを家族に伝えている。新たに看護師の入職も決定しており、全職員が安心してケアに取り組めるよう、今後も勉強会を開催されることが期待される。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故発生時の対応マニュアルを整備し、全職員が周知している。また、天草広域御所浦分署の指導の下、普通救命講習を定期的に受講しており、実際の利用者の急変時には慌てることなく心肺蘇生等の対応が出来た。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	6ヶ月に1回、年2回の火災時避難誘導訓練を実施しており、そのうち1回は天草広域御所浦分署消防署員に立ち会ってもらい、指導・助言をいただいている。また、昨年度は土砂災害を想定した第一次避難所までの避難誘導訓練も実施した。	年2回火災を想定した避難誘導訓練を実施し、うち1回は消防署の協力が得られている。山手にあるホームでは土砂崩れなどの自然災害について、運営推進会議の中で地域代表者と協議し、一時避難所である総合センターへの避難を体験している。日々の安全点検を日誌に記録し、備蓄品については定期的に賞味期限を見ながら入れ替えをおこなっている。	ホームの存在は、地域の方々にも明かりが灯ることや職員が野菜を届けることで安否確認とする等、安心感と心強さとして生かされている。災害対策マニュアルについて、外部の意見から見直しがおこなわれるなど、地域からの助言や協力が得られており、引き続き有事の際の地域との連携を期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	若い職員が方言の意味を覚えると喜ばれることもあり、日常会話においても方言を用いながらも本人の人格を損ねないよう配慮しながら対応している。	職員は入居者への尊厳について研修の機会をもち、特に言葉づかいに関しては実例を通して自己のケアを振り返っている。長年のかかわりから、親しみを込めながらもつい馴れ合いになったり、幼児語など不適切な言葉使いになることもあるとして、互いに気を引き締めるよう再確認している。呼称は苗字にさん付けや下の名前前で対応し、個人情報保護や職員の守秘義務について、情報漏洩に努めている。	言葉遣い等、事例(幼稚言葉、上から目線での言葉等)を通じた勉強会が行われている。入居者との距離が近く、馴染みの関係性が出上がっているホームであり、ややもすると馴れ合いになることも推察される。今後も、職員同士での注意喚起に期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	何気ない一言にも本人の思いが込められていることも多々あるため、聞き逃さぬよう努めている。聞き取った言葉から外出支援や受診支援等に繋げている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ベッドで休みたい、買い物に行きたい、お腹がすいた等の要望は時間や職員の都合を優先するのではなく、今本人に必要な支援と心得て希望に添えるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	理容店での散髪や染髪を希望される方には定期的に地元の理容店へ出かけていただいている。また、洋服選びは本人に任せているが、迷われて中々決定しない時は職員が助言を行う。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜の皮むき、配膳、台所での刻み作業、食器の片付け等、好みや力量を見極め作業を手伝っていただく。畑の野菜と一緒に収穫し、献立のアドバイスをもらうことでも食事が楽しみの一つとなっている。	入居者の好みを反映した手作りの食事は毎回好評であり、職員も入居者の間に入り、同じメニューを摂っている。テーブルを囲んで野菜の下ごしらえをしたり、コロッケ作りに精を出される方もおられる。パンの日や、弁当の日として目先を変え、庭先で昼食を楽しむなど工夫している。裏手の菜園作りを入居者と行き、食卓に上ることで会話に繋がり、調理という得意分野を生かしながら食を楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者一人ひとりの水分を欲される時間帯、空腹を感じられる時間帯というのを全職員が認識し、また意識しながらそれらを提供をしている。また、病状の面から食事量が少ない利用者には、かかりつけ医と相談し栄養剤を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後全利用者に口腔ケアへの声かけや誘導を行っている。自力でのケアが困難な方には、口腔内の清潔保持は大切であることを伝えながら職員が介助を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者一人ひとりの排泄パターンを把握し、声かけや誘導することでトイレで排泄できるよう支援をしている。	入居者は自由にトイレに行かれる方や、職員の定時の声掛けや個々の様子からトイレへ誘導する場合など、個別に支援している。夜間帯のリハビリパンツから、日中の布パンツへ移行するタイミングも個別に検討し、ポータブルトイレを使用する方には、出来ないところを介助したり、ベッド上からの移乗を見守りながら入居者の自立を支えている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日のおやつに牛乳を取り入れている。バナナやヨーグルトも定期的に摂取できるよう工夫をしている。日課の体操やレクレーションに加え、個別の散歩やリハビリ体操で便秘の予防に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	大まかな入浴時間は設定しているが、その日の利用者の状態やそれぞれの意思を尊重し、無理なく入浴が楽しめるよう支援をしている。	入浴は午後3時以降、おやつが済んだころを目途に開始しており、長年の生活から入居者自身が流れをしっかりと把握されておられるようである。週3～4回を目安にしているが、中には毎日入の方もおられるなど、楽しみにされていることが窺える。中には拒否の強い方もおられ、声掛けはするものの無理強いせず、その気になれるのを待ちながら入浴間隔が空かないよう努力している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	午前中大半の利用者が活動に参加するなどしてホールで過ごされるが、午後は自室で午睡される方、和室で臥床される方、ソファで寛がれる方、思い思いに過ごしていただいている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お一人ずつの薬ケースに薬局から配布された説明書を添付し詳細について確認できるようにしている。薬の内容に変更や増減が生じたときは業務日誌、個人記録に記載するとともに、口頭でも申し送り情報を共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事作業、貼り絵などの制作活動、利用者や職員との会話等それぞれの楽しみを継続することで、張り合いのある生活が送れるよう支援している。		
49	(18)	一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	本人の要望で何十年ぶりの知人宅に訪問し昔話を楽しまれたり、ホーム周辺の「桜が見たい」「紅葉が見たい」の利用者の言葉で散歩にでかけていただいている。	職員は入居者との普段の会話から外出への希望を聞き取り、町の文化展に出品した作品の見学に出かけたり、夜間帯のイルミネーション見学やドライブ、島内マラソンの応援、車いすでの散歩など地域の資源を活用して外出している。地元の神社行事(よいとんご)では、子どもたちとリビングで触れ合ったり、花火大会では近隣者が開始時間を知らせてくれるなど、ホームの中で地域行事を楽しむことも心掛けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族の要望で「お預り金」の名目で、ホームで管理をしている。少額を自身で管理されている方は、職員と一緒に買い物に行き、果物やお菓子等の嗜好品を購入されている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居時家族の要望で携帯電話を持ち込まれた利用者もあり、気掛かりなことがあったときは自ら入電され安心感を得ておられる。また、ご家族からの贈り物に、一筆添えられてあった場合は職員と一緒に読み上げ、ご家族の思いが伝わるよう支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者と職員でリビング、廊下、玄関の掃除を日課としており、時には利用者から「手が届かないから手伝って!」等の声も聞かれる。リビングから正面に見えていた木々の茂みが、最近伐採され視界が開けると「明るくなったね」「眺めが良くなった」と利用者も大変喜ばれた。	ホーム内は終日賑やかな声に包まれており、日中はリビングを中心として生活している。朝の掃除も入居者と一緒に行い、掃き掃除など自分の役割として力を発揮されている。入居者の状況によって見直したテーブルなどの配置や、掲示物(季節の写真や干支の紹介など)は、入居者にわかりやすい表示を心掛け、居心地の良い空間を提供している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	日当たりの良さを求めて和室に行かれたり、ウッドデッキに出て畑の様子を眺めながら会話を楽しんだり、また台所が落ち着かれる方は、炊事担当の職員と台所でお茶を飲んだりそれぞれの居場所で楽しい時間を過ごしていただけるよう支援している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に家族にも、本人縁の物や使い慣れた物の持参をお願いしている。家族写真を眺めながら言葉を掛けたり、使い慣れたラジオを職員の支援不要で好き時に傾聴しながら横になられたり、心地良い空間で過ごしていただいている。	入居時には家族に本人の使い慣れた品の持ち込みを依頼しているが、新たに収納ケースなどを購入する方もおられる。ベッドが置かれた部屋が大半であるが、中には畳敷きに布団の部屋もあり、布団たたみが起床の合図となっている入居者もおられる。家族も面会時に手作り品や入居者の思い出の品を飾るなど、協力も得られている。数ヶ所の部屋に設けられたポジションングバーが、立ち座りや移動の自立に生かされ、入居者の安全な生活を支えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホーム内完全バリアフリーであり、安全な歩行が確保できるようになっている。トイレや脱衣所、各居室にはプレートを掲げ黙視での認識が出来るように工夫をしている。理解が困難な利用者には声かけや誘導で理解できるよう支援を行っている。		